

不妊治療で鍼灸治療を希望される方へ

近年、不妊治療の補助的治療として鍼灸治療を利用される方が増えています。不妊治療（体外受精）の現状が報告されています。

2019/03/01

不妊治療の現場では、「卵巣年齢の検査（血液検査だけで）」を調べるのがここ数年知られるようになってきた。「AMH（アンチミュラーリアンホルモン）検査」は、卵巣にある「卵子の在庫数」を推測する検査であり「卵巣の老化度」を調べるものではない。体外受精で採卵（卵巣で育った卵子をカテーテルで採り出すこと）をする際、事前に薬を投与して卵巣内でたくさんの卵子を育ててから採る方法は、日本では多く行われているが妊娠率が低いということが明らかになっています。実際、海外ではあまり行われていません。

現在は、受精卵を凍結させた方が妊娠率が上がるといわれています。

なぜ受精卵を凍結した方が妊娠率が上がるのか？

①体外受精の際、できた受精卵（胚）を子宮に移植するには凍結せずに、すぐに子宮に移植する「新鮮胚移植」②凍結してから移植する「凍結胚移植」があります。

このふたつの方法を比べると、最新のデータでは新鮮胚移植より、凍結胚移植のほうが1.5倍も妊娠率は高いのです（日本産科婦人科学会2013年発表データより）。

受精卵を凍結しない場合、採卵したその周期に受精卵を子宮に戻さなければならないので、子宮内の状態が整っていないこともあるのですが、受精卵を凍結させると、子宮内膜の状態が着床しやすいように準備ができたタイミングで移植することができるからなのです。

不妊治療で鍼灸治療を行う場合、上記の報告にあるように②凍結してから移植する「凍結胚移植」方法と合わせて行うことが望めます。鍼灸治療を行うと、卵胞の発育を良くしたり、採卵数が増えたり、卵胞の発育を良くする（グレードの高い）と言われていました。また、胚移植前後に鍼灸治療を行うと着床率を高めると言われています。しかし、現実には採卵→移植を繰り返して体外受精を行っていることが少なくありません。鍼灸治療をより効果的にするには、鍼灸治療を続けながら採卵期を数周期（3-4周期）続け、子宮の環境を整える期間（3-4周期）をおいて、体外受精（受精卵を子宮に戻す）を数周期（3-4周期）続けるとしたサイクルが望ましいと思います。

現在の不妊治療は、からだ（卵巣や子宮）への負担が大きいかと考えます。不妊治療を受けられる皆様は、不安や焦りが強くご自身のおからだをあまり、労わらない様に感じます。まずは、ご自身のおからだを大切に不妊治療を行っていただけたら幸いです。